

地方創生事業好事例紹介

じゃぱにうむ

じゃぱにうむレビュー 第9回

地域活性化に向けて人と人をつなぐ
エンゲージ・プロモーター

光文堂コミュニケーションズ株式会社

光文堂コミュニケーションズ株式会社
所在地：沖縄県島尻郡南風原町字兼城 577
代表者：代表取締役社長 外間 なるみ
従業員数：158 名（2022 年 4 月現在）
URL <https://www.kobundo.net/>

今年 5 月 15 日、本土復帰 50 周年を迎えた沖縄で、戦後間もない 1950 年に設立された印刷会社がある。光文堂印刷所だ。創業以来同社がずっと大切にしてきた理念は、「人と人とのつながり大切にする」。設立から 60 周年の節目、社名を光文堂コミュニケーションズ株式会社に改称した際に、この理念に沿ってシンボルコピーとして「人と人をつなぐ幸せを、いつまでも」を掲げた。代表取締役社長の外間なるみ氏は、人と人が触れ合う場が減ってきている現在、あえて部署や世代を超えていいことも悪いことも「とことん話し合うことのできる組織」を目指しているという。

「おきなわいちば」を軸に

そんな光文堂コミュニケーションズが発行する季刊誌がある。「おきなわいちば」はつくる人と食べる人をつなぐ、暮らしと食の雑誌。3 月、6 月、9 月、12 月と年 4 回、15,000 部を発行するこの季刊誌は、沖縄では各コンビニエンスストアや書店などで、北海道、東京、埼玉、大阪、兵庫では書店などで、定価 700 円で販売されているが、この 6 月に発行された第 77 号は完売となっている。フリーペーパーではなく 700 円と決して安くはない定価のついた情報誌が完売するにはそれなりの理由がありそうだ。

その秘密は、観光という目線では見つけられない、沖縄に住む人たちのふだんの暮らしから見えてくるとびきりステキな“いつもの沖縄”をピックアップしているからではなかろうか。

「くらし」「食べること」「おでかけ」「おかいもの」「日々のこと」といったカテゴリーの記事が丁寧に取材され、美しい写真とともに掲載されている。中でも、特に「食べること」では、つくる人（農家さん）と食べる人（消費者のみなさん）をつなぐことを目指し、様々な食の情報が満載されている。これは正しくシンボルコピーに掲げられている「人と人をつなぐ幸せを、いつまでも」を具現化する取り組みであろう。

しかし「おきなわいちば」は単に情報誌の発行だけに止まらない。この情報誌を編集・制作していく過程で取材した店舗や施設の商品を販売する e コマースサイト「おきなわいちば SELECT SHOP」の運営も行っている。陶器等の生活雑貨から、袋物、アクセサリ、T シャツ等のファッションや

ポストカードといった文房具まで、沖縄ならではの魅力にあふれる商品が並んでいる。観光スポットのお土産屋さんではなかなかお目にかかれない、職人が作り込んだ逸品が目を引く。



「おきなわいちば」最新号



毎年 11 月 1 日は「泡盛の日」。酒造りが 11 月から最盛期を迎えることに因み、1989 年に沖縄県酒造組合連合会により制定されたこの「泡盛の日」に合わせ、『琉球泡盛の粋 in 銭蔵』が 2018 年 10 月 27 日、28 日及び 11 月 1 日から 4 日にわたって開催された。これは、琉球王国時代に思いを馳せ、琉球泡盛を味わいながら、その文化を語り合う時間・空間を創出し、広く県民や観光客に琉球泡盛を深く知ってもらふイベントだ。琉球泡盛の歴史・文化、製造工程を紹介するパネルのほか、酒器の展示、沖縄の伝統的な古酒作りの手法「仕次ぎ」の疑似体験、琉球泡盛 47 銘柄の試飲・販売、泡盛の楽しみ方を解説するワークショップまで、様々な企画が用意され大いに盛り上がった。

首里城の中で泡盛が保管されていた「銭蔵」を中心に開催されたこのイベントの運営を司っていたのが光文堂コミュニケーションズだ。年々出荷量が漸減する泡盛業界の復興に向けたイベントを通じて、地域経済の活性化に貢献している。

首里城の復活に向けて

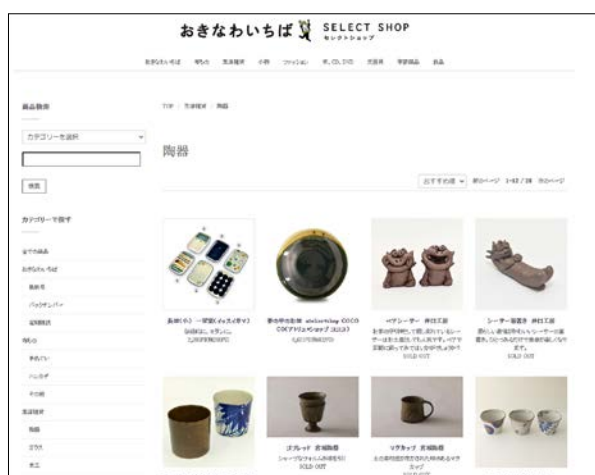
そんなイベントの舞台となった首里城が火災に見舞われたのは、2019 年 10 月末のこと。まだ記憶に新しい。この不幸な出来事に加え新型コロナウイルスの感染拡大は観光立県沖縄に経済的な大打撃

を与えた。そんな中、光文堂コミュニケーションズは、地域経済の活性化に資する事業を標榜している。

そのひとつが、内閣府沖縄総合事務局運輸部が主管して進めた「首里城公園を中心としたナイトタイムコンテンツ造成事業」だ。ピーク時には年間 280 万人もの観光客が訪れていた首里城だが、焼失により一般観光客や修学旅行生等の来場者が大幅に減少した。それに伴い、首里城公園のみならず近辺の飲食店や観光事業者への影響が大きく、いち早い復興が望まれていた。首里城公園への来園者数増強のための夜の首里城公園を楽しむイベントにおいて、「首里夜市」の企画・制作・運営を提案して受託した。更に「首里城基金支援カレンダー」の制作・販売により、2019 年～ 21 年までの 3 年間で約 500 万円を沖縄美ら島財団に寄附したという。

また沖縄県が県内の地産地消の促進を図る「おきなわ食材の店」プロジェクトにおいても料理試食会から、登録の募集、登録証交付式までを受託。他にも県産のきのこや島野菜等の料理コンテスト、県産の食材や産品を集めて販売する「島いろマルシェ」の運営のほか、沖縄県企画部地域・離島課が主催した「平成 28 年度離島観光・交流促進事業 島あっちい」でも運営事務局を務める等、枚挙にいとまがない。

外間社長の目指す「とことん話し合うことのできる組織」から繰り出される次なる施策に、ちむどんどんしながら期待するのは筆者だけであろうか。



「おきなわいちば SELECT SHOP」



「首里夜市」の様子